「ピーマンを明るく」～池田澄子の滑稽句～

川名将義

第三回滑稽俳句大賞が決定した。一句勝負ではなく、十句の総合力で競う事で、レベルの高い滑稽俳句大賞になった。大賞受賞句は、

我が辞書に「不可能」の文字雁渡る

遊び舟月の監視を逃げきれず

鳶が鷹生むわけもなく桐一葉

をはじめ、秀句揃いであった。

前振りはともかくとして、今回は俳人、池田澄子の滑稽俳句を鑑賞したい。女性の年齢を探るのは失礼にあたるが、昭和十一年生まれでいて、未だにフレッシュな俳句、滑稽句を書き続けている。高齢滑稽ハイカー（俳句家）に、大いに勇気を与えてくれる存在である。

ピーマン切つて中を明るくしてあげた

氏の代表句の一つ。ピーマンの中で暗さを託っていた種達に、すぱっと切ってその中を明るくしてあげたと、切った側は親切心を強調しているのだ。だが、切られた方はその先で刻んで食べられる訳で、「小さな親切、大きなお世話」と思っているかも知れないのである。そのギャップが滑稽である。

山椒魚ついつい山椒魚を産み

鳶だって鷹を産もうとしているのだから、山椒魚だって錦鯉を産みたいと思っているのである。しかし悲しいかな自然の摂理は、山椒魚には山椒魚を産む実力しか備わせていないのである。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

元日の開くと灯る冷蔵庫

冷蔵庫は二十四時間三百六十五日、休まず一家のために働いてくれている。大黒柱のお父さんより働き者かも知れない。元日だって扉を開ければ、祝日だから休むなんて言わないで、機械的に明りを灯して迎えてくれる。機械だから…。そのあたりが可笑しくもあり、ペーソスもありである。

じやんけんに負けて螢に生まれたの

この句の主体は誰かと考えた時、主体は螢ではなくて、じゃんけんに勝って人間に生まれた作者である。で、勝敗によって人と螢に生まれ、二者は、果してお互いに幸せなのだろうか。そんな余計な事まで考えずとも、生殖行為とは別に、魂はじゃんけんで何に生まれるか決めているという、このユニークな発見と滑稽さに脱帽する。この生誕に対する神秘の念は、俳句にも深いテーマであるようで、

夏霧や人に生れる列にゐて　　まついひろこ

という句もある。

青嵐神社があつたので拝む

散歩の途中に、とある神社の前を通ったのである。特段に八百万の神々を信仰している訳でもないのだが、鳥居を見るとついつい律義に拍手を打って、手を合わせて拝んでしまう。そのあたりの、純粋培養の日本人らしさが、微笑ましくて、滑稽でもある。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。